式辞

４月に入り、十勝も春があたり一面に噴き出してきた印象があります。ようやく厳しかった冬から抜け出せた、との安堵の気持ちでいっぱいになります。この爽やかな春の日に、第６４回入学式を挙行できますこと、私共教職員をはじめ本学関係者一同、心から嬉しく思っています。まずは、地域共生学科「キャリアデザイン」コース２１名、同じく「食と栄養コース」２４名、社会福祉科子ども福祉専攻５５名、同じく介護福祉専攻１２名、さらに今年度から新設されました看護学科２５名、総計１３７名の新入生の皆さん、ご入学、誠におめでとうございます。

さて、コロナ禍も一区切りを迎えました。マスク着用に関しても自己判断で、という形になりました。皆さんは高校時代の３年間、コロナと向き合い、辛いこと悲しいことなど多かったかと思います。まだまだ全て自由になったわけではありませんが、それでも気持ちとしては軽やかな雰囲気になったと思います。どうか、これからの学生生活を存分に楽しんでください。もちろん、「楽しむ」というのは「遊ぶ」ことだけを指してはいません。自分の目的に向かって邁進する「喜び」を指してのことです。やりたいことを存分にこの学舎（まなびや）の中で取り組んでください。

ところで、帯広大谷短期大学は今年、新学科であります看護学科を設置しました。ここに入学された２５名の皆さんは一期生でもあり、これからの学科の歴史を作っていく人たちです。どうか、自分たちで歴史を作っていくのだという強い思いを持って、この３年間充実した学生生活を送ってほしいと思っています。また、地域共生学科として地域教養学科と生活科学科栄養士課程が統合され、同じく第一期生となります。これまた、どうか新鮮な気持ちで２年間の歩みを進めてほしいと願っています。

さてこの機会に、新入生の皆さんに私からお願いを申し上げたい、と存じます。それは、自

分の成し遂げたい夢に向かってひたすら突き進んでいってほしいのです。途中で投げ出すことなく、その為には我慢もし、時にはがむしゃらに前向きに進んでください。立ち止まっても構いません。それでも後ろ向きになることなく、前へ前へと歩んでほしいと願っています。それは若さゆえの特権でもあり、今この時にしかできない「夢のような時間」だと思います。

帯広大谷短期大学は先ほど申し上げたように新学科である看護学科、そして地域共生学科を設置しました。一人一人が地域において有益であること、そのために何ができるのかを考えたがゆえですが、つまり十勝という地域において私たち帯広大谷短期大学に何ができるのか、その答えでもあります。少子高齢化が叫ばれて久しいこの時代、放っておけば日本の未来は極めて厳しいのはいうまでもありません。それでも、皆さんのようなエネルギッシュな若者たちを地域が求めているのです。どうか、本学でこれから学ぶ様々な知識や技術を十分に発揮できるような魅力あふれる人となってください。

本学の「建学の精神」は浄土真宗・親鸞聖人の「み教え」にあります。命を大切にすること。自分のみならず、他者を尊重できること、そしてそこから「大いなる命」の存在に気づくこと、にあります。皆さんの命は皆さんだけのものではありません。脈々と続く「いのち」のつらなりの中に稀有なる存在として皆さんの命があります。しかし、それは口で言うほど簡単な話ではありません。特に他者を重んじることの難しさは皆さん、今までの人生の中で十分に経験できたことでありましょう。人の痛みを知り、それを我が事のように感じること。是非、この域に少しでも近づけるように学んでください。それは、きっと皆さんのこれからの人生に素晴らしい彩りを添えることになると思います。必ずや、2年後、3年後の卒業時に実感できるはずです。どうか、人としての度量の大きさを目指し、弛（たゆ）まぬ努力を続けてほしいと思います。

少女漫画家の折原みとさんにこんな短い詩があります。**「かわっていくこと」**と言うタイトルの

詩です。

かわっていくことは、怖くない。

ワクワクしたいな。

明日の自分に。

ぜひ常に、自ら変貌していくワクワク感を感じながら、充実した学生生活を送ってください。

最後に保護者のみなさま。本日は誠におめでとうございます。確かに、新入生の皆さんをお預かりいたしました。心配や不安も多いかと存じますが、どうか私共を信頼いただき、見守ってくださると幸いです。そうはいっても何かございましたら、遠慮なくおっしゃっていただけると幸いです。皆さんと共に、この前途ある若者たちの成長に関わっていけたら、と思っています。どうかよろしくお願い申し上げます。

それでは新入生の皆さん、共に有意義な年月をこれから過ごしてゆきましょう。

令和5年4月4日

帯広大谷短期大学　学長　田中　厚一